

大地を耕すことは、
人の心を耕すことだ!!!



一つの例があります。そして、この秋田県の白神山系の山並みをバックにこういう言葉が言えると思います。「大地を耕すことは、人の心を耕すことだ!」、これ誰の言葉だと思いませんか。これ私の言葉です。大地を一生懸命鋤で耕すと、必ず隣近所の人が私の姿を見て、こう言います、「下手だな」と。誰が下手だと…。一生懸命耕していると、下手だとか何か言われているけれども、その人の心を鋤が削って、そして人の心を耕して、コミュニケーションが広がっていくのだなということを思うわけです。こういうことを私は一つ言いたいと思います。

これを群馬の高崎農協で言ったときに、この言葉と似たような言葉を私は発見しました。「耕地耕心」。これくらいの色紙の中に、「耕地耕心」と書いてあった古い文字が見えました。「これはどなたが書かれたのですか」と私はその農協の組合長に聞きました。「よく見てみ」と言われて、見てみました。そうしたら、誰が書いたと思いませんか。大地を耕す「耕地」、人の心を耕す「耕心」。よく見たら、中曽根康弘と書いていました。「どっちが古いのですか」と言ったら、「当然こっちのほうが古いに決まっているだろう、おまえより」と言われましたね。そういうことがありました。かつての首相もこういう立派な言葉を言っているし、私も似たような言葉を言っている。ですから、この言葉を私の今日のお話の最後に皆さんにお伝えして、この講演を終わりたいと思います。どうもありがとうございました。

○及川らん 藤田様、大変楽しく、貴重なお話、ありがとうございました。

次は、昭和59年に農学部畜産学科を卒業された後、大学院修士課程に進まれ、現在宮城県角田市で児童文学作家と農業など、いわゆる半農半作家としてご活躍中の堀米 薫様からご講演をいただきます。それでは、堀米様、どうぞよろしく願いいたします。

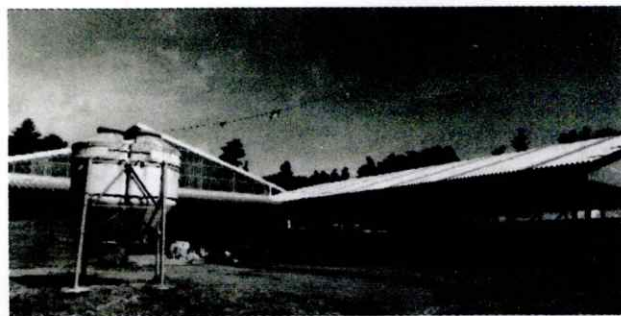
堀米 薫さん

どうも、皆様、こんにちは。藤田先生のすばらしいご講演の後でお話がしづらいのですが、どうぞ聞いてください。

私は、堀米 薫と申します。畜産学科修士59年修了で、安田泰久先生、高橋寿太郎先生にご指導いただきました。実は、私の夫は農業機械学科57年卒業です。ここに来ておりますが、講演中はどこかに行方をくらますようにと行ってありますので、いないかもしれません。息子も岩手大学の共生環境コースにお世話になりました。そこで嫁さんを見つけましたので、私の家には北水会報がたくさん届いているということでございます。もしかしたら角田支部ができるかもしれません。

現在は、宮城県の角田市で、夫で12代目になる専業農家の主婦をしております。和牛農家の繁殖・肥育一貫経営をしております。現在約200頭おります。それから、お米を3町歩作っております。キヌヒカリ、コシヒカリ、そして飼料用の稲を栽培しております。

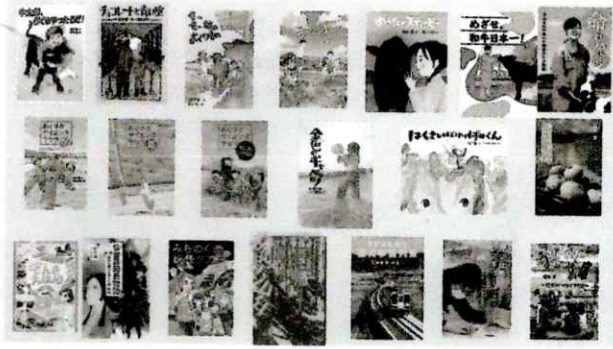
これが私が今働いているところなのですが、いつも野良着を着て生活しており、今日はちょっといい服を着てきましたので、どうも調子が悪いなという感じでお話しております。





それから、我が家は、山持ちでして、林業にもちょっと関わっております。さらに、私の夫が「あぐりっ」という直売所を農家の人たちと立ち上げました。手広くいろんなことをやっているのですが、それらをやらないと暮らしていけないということもあるのです。この「あぐりっ」のほうでは、私もよく招集がかりまして、店頭でこんなふうに餅を売ったり、コロッケを売ったり、「皆さん、いかがですか？ お安いですよ！」ということで、とにかくいろんなことをしております。

さらに、児童書作家としての顔を持っております。岩手大学農学部出身で児童書の作家をしている方は3人、私を含めて3人いるのですが、皆さんご存じだったでしょうか。まず、岩手で澤口たまみさんという方、農学科出身の方で、とても有名な方がいらっしゃいます。今回このお話を鈴木先生からいただいたときに、どうして澤口さんじゃなくて私なのかなと思って、「とてもとても引き受けられません」ということをお電話でお話したのですが、鈴木先生が「普通の人でいいですよ」と言ってくださったので、今回恥を忍んでやってまいりました。もう一人は、林学科の出身で藍沢羽衣さんという方、これはペンネームかもしれないのですが、そういう方もいらっしゃいます。3人の児童書の作家が出ております。



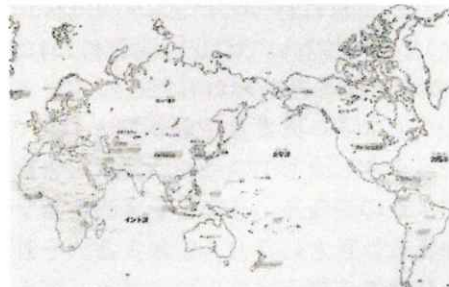
デビューして13年なのですが、今まで単行本が23冊出ています。ご覧になって分かると思うのですが、大体、牛の話が多いです。それから、こちらが稲作ですね。野菜、そして林業と、だいたい家業に関連するものばかり書いているという感じです。こちらのほうは、物語なのですが、こちらのほうは東日本大震災関連のノンフィクションになっています。こちらは、私は畜産学科の出身ですので、2017年に宮城で全国和牛共進会がありましたので、これをぜひ題材にしてノンフィクションを書こうということで書いた作品です。

よく「農家をしていて、どうして作家になったの？」と聞かれるのです。皆さんも多分そう思われるかなと考えるのですが、なぜ作家をしているのかと聞かれたときに、「それは『怒り』です！」と答えるようにしているのです。「怒り」というと、ちょっと皆さん、ギョッとされるのですが、このとおりポーッとした人間なので、拳を振り上げて猫パンチぐらいにしかならないのですが、私が夫と結婚した頃はちょうどバブルの頃でした。その頃テレビでは、もう効率が悪い農業なんかやめてしまえという方がたくさんいらっしゃったのです。でも、周りを見てみたら、農家の人は本当に一生懸命農業に取り組んでいるし、農家の方たちの知恵はすごいし、なのにどうして社会は見向きもしてくれないのかなということを感じていたわけです。

そこで、お客さんにお米を送ろうということになったときに、夫がピンクのリボンのついた箱を買ってきたのです。「はい、プレゼント」と渡されたのです。何かな、うれしいなと思って箱を開けますと、中にはワープロが入っていました。あの当時はワープロでした、今のようにパソコンはないのでね。それで、ワープロでお客さんに送る通信を書いてくれ、ということだったのです。その通信を書いているうちに、だんだん書くことが楽しくなってきました、いろいろ新聞とか、それから雑誌に投稿なんかするようになったのです。それがだんだん高じていきまして、同人誌ってご存じでしょうか。いろんな文章を

書くのが好きな方が集まる同人誌というのがあるのですが、それにも関わるようになりまして、児童文学の作家の方に何度か自分の作品を見ていただいていたら、突然「あんた作家になれ！」と言われてしまったのです。私は、全くの農家の主婦ですし、作家になるなんて一度も考えたことがなかったので、本当にびっくりしたのですが、プロの作家の方がそう言うのであれば、ならなきゃいけないのかなと思って、書き続けて今に至っているということです。ただ、そのときに、自分は農学部出身で、文学の勉強もしたことがないので、そしてまた農家をしているので、農業を軸足に書いていこうと心に決めました。

世界中からやってきた研修生&ホームステイ



では、私の著作の中から何冊か取り上げて紹介させていただきたいと思います。最初に、世界地図が出てまいりました。この緑色に塗ってあるところが、全部私の家にやってきた研修生、ホームステイのゲストが来た国です。北欧、それから中央アジア、アフリカ、オセアニア、北米、南米、本当にほとんど世界中から来たのです。20ヶ国ぐらいになったかなと思います。私は、牛を飼っているのですが、なかなか旅行にも行けないし、お金もないのですが、家にながら世界旅行ができるのかなということでした。

その中で忘れられなかったのが、こちらのアフリカのガーナから来た研修生の方なのです。皆様、ガーナと言えば、チョコレートですよね。やっぱりチョコレートだと思うのです。私、ガーナから来た研修生に、「いいですね、ガーナはチョコレートがたくさんあって、食べ放題なんでしょうね」ということをお話ししたのですが、研修生から「大人になるまで食べたことがないです」と言われまして…。びっくりして、調べてみますと、チョコレートの原料になるカカオを子供たちが学校にも行かないで採っているという、そういう児童労働が問題になるということに行き当たったのです。現在に至るまでなのですが、例えば100円のチョコレートを作るのに労賃は幾らぐらい支払われているか想像がつかまずで

しょうか。何と7円なのです。本当に安いのです。そのことを知ったときに、本当にびっくりしました。そして、生産者に適正な報酬を払うフェアトレードということを知りました。ただ、農産物が適正な価格で取引されるということは、果たして発展途上国だけの問題なのかなということも考えたのです。結局、私たち日本の農家も、農産物をちゃんと適正な値段で売ることができていないという問題にもぶち当たっているのではないのかなということで、そうしたことを小学4年生の男の子と農業研修に来たガーナ人青年との交流にまとめて物語にしました。



この本のテーマは、フェアであること、そして家族愛、誇りとしました。家族愛も誇りも、これまで出会った研修生たちの言葉が基になっているのです。どの研修生たちも、「私たちは家族を愛しています。自分の国に誇りを思っています。そのために働きたいんです」と私に言うのです。果たしてその言葉を前に、自分は同じように言えるのかなと思いながら、つくづく考えさせられたからです。



この本には続きがありまして、出版から1年後に日本国の駐ガーナ大使夫人から、英訳してガーナで出版したいというメールが届きました。2014年に英訳本が出版され、さらに大使夫人からは「出版記念会をするから、堀米さん、ガーナに来ませんか」と電話が届いたのです。ところが、当時はまだ「汚染稲わら問題」、皆様覚えていらっしゃるでしょうか、

汚染稲わら問題で我が家の経営は大変な危機を迎えておりまして、とにかくお金がないということで、「旅費もかかるから、もう絶対無理だよ」と夫に言いましたら、「いや、こんな機会は二度とないから行ってこい」と背中を押してもらいました。「ただしな」と、「ただし、地元の新聞社に電話してから行けよ」と言うのです。それで、これこれこういうわけでガーナに行くので、帰ってきたらルポとか記事を書かせてくださいというふうに言うんだぞと知恵を授けてもらいまして、それで何とかガーナに行くことができた……ということなのです。こんなふうにはガーナに行きまして、大使夫人と一緒に幾つかの小学校を親善訪問してきました。そのとき、空港で「ニイハオ！」と随分呼びかけられたのです。その頃からもうアフリカへの中国の進出がとても問題になっていましたので。なるほどな、こういうこともあって大使夫人がこれを英訳して、ガーナで出版したいと思ってくださったんだなということを感じてきました。



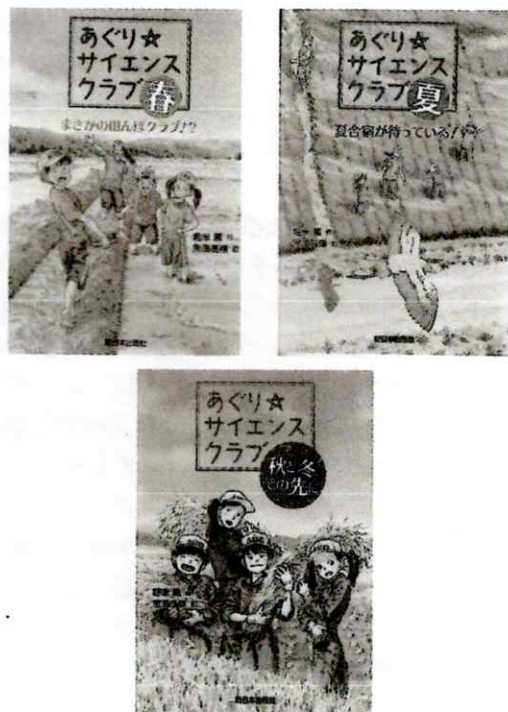
では次は、もう一つの家業の林業です。その林業を題材にした「林業少年」という本を書きました。この絵をご覧になって、林学科の方ならもうすぐにパッと分かると思うのですが、間伐の行き届いた明るい山ですね。私が嫁に行った頃、堀米家、とても山持ちでして、裏山の100年杉を買いにお客さんが来るのです。目の前でしゅうとさんとお客さんが相対取引を始めたのです。それをワクワクしながら聞いておりました。その頃まだ馬搬も残っておりまして、それもワクワクしながら見ていました。それに木こりさんから木にまつわる知識もたくさん教えてもらうことができました。大学では、畜産専攻だったのですが、嫁に行ってみたら林学の勉強もできました。

一方で、現在に至るまで林業は衰退の一途を辿っています。多分一般の方は山を見て、スギ花粉が迷惑だとか、そういった認識が多いかなと思うのですが、安いから自分の国の木を使わないで輸入し、花粉が迷惑だというのもとてもおかしい話だなと私は思っています。

児童書の世界では、林業を取り上げた物語というのはほとんどないのです。それで、林業の現状と山を支える職人たちの姿、そして未来への希望を伝えられたらと思って、この本を書きました。なぜこの児童書を書いているのかといいますと、大人の本は大人しか読めませんよね。でも、児童書は、子供も大人も一緒に読むことができるというのがとても魅力なのです。それで、林業のことをよく知らない子供、そして大人の方にも少しでも伝えられたらな、と思って書きました。この本がご縁で福島県の林業まつりにも講演に呼んでいただき、林業関係の皆様にも喜んでいただけて、とてもよかったなと思っています。

では次は、もう一つの家業のお米、稲作です。「あぐり☆サイエンスクラブ」シリーズという本を書きました。春に東京に行ったときのことなのですが、「田んぼの仕事で忙しいでしょう」と言われまして、「はい、やっと種まきが終わったところです」と言いましたら、「何の種まき？」と聞かれたのです。本当にびっくりしまして、今や「農家の常識は世間の非常識」なのだということを感じました。今、米作りというと、田植えと、それから稲刈りしか体験する機会はないですよね。だから、そんなふうにはしか認識できないのかなと知って、とても残念に思っています。

そして、もう一つ、イベルメクチンでノーベル賞を受賞した大村 智博士はご存じでしょうか。大村博士は農家の長男坊だったそうです。それで、農作業の手伝いをしながら育ったそうなのですが、インタ



ビューの中でこうおっしゃっていたのです。「農業は科学であり、農家は科学者です」と。私はそれを聞いたときに、何かもうテレビの前で飛び上がりそうなぐらいうれしくなりました。よくぞ大村先生言ってくれましたということで、この「あぐり☆サイエンスクラブ」、農業科学のクラブという本を書きました。

この物語は、小学校5年生の男の子がひょんなことから科学クラブに入ったら、農業を体験しながら科学も学んでいったという筋立てになっています。もちろんこの本には、種まきのシーンも入れました。

そして、この春の巻が出た後は、皆さんに「続編は秋ですか」と聞かれたのです。皆さん、田植えと稲刈りしか経験していないので、当然そうなると思うのですが、夏の田んぼを経験する機会がほとんどないのが現状なのです。それで、この夏の巻には、主人公たちが田んぼの草取りをするシーンも入れました。実は、結婚したばかりの頃、夫に「ちょっとやってみなさい」と言われて田んぼに連れていかれて、田んぼの草取りをしたことがあります。僅かばかりの田んぼだったのですが、もう日差しで背中のはじりじりになりますし、筋肉痛になるし、寝込んでしまったのです。これは、大変な体験である一方、やっぱり体験してよかったなと思いました。こうまでしないとお米って口に入らないのだなということがよく分かったからです。

そして、これが「秋と冬、その先に」です。一般には稲刈りしか体験できないのですが、この中では田んぼの土に微生物などたくさんの命が存在しているという、土壌微生物の片りんも学ぶような形にストーリーを書いています。

農業を知らない人がどんどん増えている今だからこそ、農家目線の本をこれからを担う子供たちに届けられたらなと思っています。先ほどの藤田先生のご講演では、家庭農園とかそういったもので農業というものを伝えたいということをおっしゃっていたように思うのですが、私はこういった児童書を通して伝えられたらなと思っています。



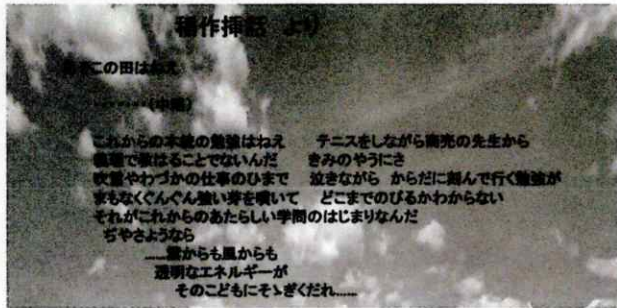
最後なのですが、これは絵本「ゆうなとスティービー」という本です。私の家では、牛を飼っていますので、しょっちゅう病気になったり、事故があったりと、様々なことが起きるのです。ちなみに、現在お世話になっている獣医さんなのですが、岩大出身の獣医さんが3名いまして、以前どうしても良くない子牛がいたときには、トラックに乗せて、子牛を宮城からはるばる岩手大学の動物病院まで運んで手術をしていただいたこともありました。今、産業獣医の成り手がいないと言われていまして、こうした人材を岩大が輩出してくださることを農家として心から感謝したいと思っております。牛を飼っているので、「ドナドナ」の影響でしょうか、「出荷のときは涙が出るんでしょう」とよく言われるのです。夫は「そういうときは『札束にしか見えませんよ!』と言えばいいんだ」と言うのですが、私はそこまでは言えないなということで、どういうものかなと考えていたのですが、ある日、難産で目の見えない子牛が生まれたのです。命は助かったのですが、どうやって育てようかと、とても戸惑いました。それで、耳だけは聞こえるので、スティービーと名前をつけて、専用の小屋で大事に大事に何倍も手をかけて育てたのです。いよいよ出荷のときは、さすがに寂しくて涙が流れました。でも、すぐに、ああこれでよかったんだと、胸の中がスーッと晴れ上がったような感じがしたのです。というのも、私たちが一生懸命に育てた牛が肉になって、それが食べられて、食べた人の命になって、ずっと輝き続けてくれるのだなということが、そのとき初めて心から納得できたというのがあります。そんな体験をさせてくれたスティービーのことを絵本にしたものです。

昔は家で牛や鶏を飼っていたものですが、今はそういう機会もないようですね。それで、家畜とペットの差が分からない人も増えているような気がいたします。そんな意味でも、こういった絵本を通して、少しでも畜産の意味が伝わったらなと考えています。

これまで平成5年の大冷害や度重なる洪水を経験してきました。それから、畜産では牛肉・オレンジ自由化、BSE、口蹄疫、原発事故の被害だとか本当にいろんなことを乗り越えながらやってきました。そんな日々の中で、脳裏によみがえったのは、岩手大学入学式のときの石川武男先生の姿なのです。「農民のために!」と、熱く、熱く語られていたあの姿が時々よみがえってきて励まされるような思いがいたしました。

それから、もう一つは岩手大学の先輩である宮澤賢治の作品です。学生時代は、岩手山を見ながら「春と修羅」を開いたのですが、もう頭が悪過ぎて

記念講演分かりませんでした。でも、年を経るごとにだんだん自分の体の中に沁みしてくるようになったのです。



特にこの「あそこの田はねえ」で始まる稲作挿話は皆様ご存じでしょうか。私は、この詩がとてとても大好きなのです。この詩を読むと、これから幾つもの困難に直面するであろう若者の未来を案じ、励ます賢治の思いが痛いほど分かるようになったのです。特にこの最後の部分、『これからの本統の勉強はねえ テニスをしながら商売の先生から義理で教はることでないんだ きみのやうにさ 吹雪やわづかの仕事のひまで 泣きながら からだに刻んで行く勉強が まもなくぐんぐん強い芽を噴いて どこまでのびるかわからない それがこれからのあたらしい学問のはじまりなんだ』と、ここの部分がとてとても大好きで、何度も読み返しています。私自身も体に刻みつけながら農業を学ぶことでやっと賢治の思いに触れることができたのかなと感じているからです。

さて、賢治にははるか遠く及びませんが、これからは畑や田んぼでどうしてもこんなことがあるようで仕方がないということや、体に刻みつけてきたことを、牛の歩みのようにこつこつと書いていけたらと思っております。

ここまでお聞きいただきましてありがとうございます。ありがとうございました。

○及川らん 堀米様、ジーンと来るお話ありがとうございました。

続きまして、昭和62年に農学部農芸化学科を卒業された後、大学院修士課程に進まれ、現在、福島県福島市で「やまろく商店」の代表取締役として地元福島の農業の振興と農村の発展に様々な知恵と工夫を凝らしておられる佐藤康毅様からご講演をいただきます。

それでは、佐藤様どうぞよろしくお願いたします。

佐藤 康毅さん

どうも、皆さん、こんにちは。福島からやってきました佐藤康毅と申します。米屋です。

今日のタイトルは「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」ということになりました。司会の及川さんが一番最初（物故者黙禱）に言っていただいて、我が意を得たりという思いでした。今日は、このタイトルに沿ってスライドを動かしていきますので、この言葉を思い返しながらいただければと思います。

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない

【農民芸術概論綱要】

グローバルに考え、ローカルに為せ

地球規模で考え、足元から行動せよ

岩手日報 令和3年12月11日

佐藤 康毅（C昭和62・院元）
有限会社 やまろく商店 代表取締役
ファームランド株式会社 代表取締役

令和4年7月1日（金）
「ホテルメトロポリタン盛岡ニューイング」

そしてその下ですね、「グローバルに考え、ローカルに為せ」、これ伊藤菊一先生が、岩手日報社に記載された言葉です。僕たち米屋というのはローカルに為すことしかできないです。「ローカルに為す」、隣の人を幸せにするというのが世界全体の幸せにつながるのではないかなと思って、日々やっております。

話の内容ですが、プロフィールを話した後に会社の経営理念を入れました。一番最初、鈴木先生からお話しをいただいたときに、経営理念のことをすごく褒めていただきまして、それでは今回経営理念の話をしてみようかなと思いました。現在の活動と、これからとちょっと今後のお話しをしたいと思っております。

私は、昭和38年5月に福島市で生まれました。昭和62年3月に岩手大学農学部農芸化学科、平成元年に岩手大学大学院農芸化学専攻を修了し、呉羽化学工業という会社に入りまして、農薬の開発、新規酵素の探索などをやりました。しばらく仕事をしていたときに、妻の親父さんが跡を取ってくれないかみたいな話になりまして、平成10年に呉羽を退社し、今の「やまろく商店」に入社しました。平成14年2月に一般の人が買いに来られるような「農家の店ファームランドヤマロク」という店をオープンし、今、両方の会社の代表をしております。